富山大学 学園ニュース

特集■「読　　書」

編集　学園ニュース編集委員会　　発行　富山大学学生部　　平成5年12月　NO.82

目　　次

特集「読　　書」

1冊の本 …… 1
目からうろこが落ちた本 …… 2
わたしの推薦図書 …… 7
読書のすすめ …… 12
富大書籍ベストセラー＆雑誌ベスト5（富大生協調） …… 13
本代は増加している… …… 15
気持ちはあるが伸びない読書時間 …… 16

わたしの研究室

日本言語文化研究室　（人文学部） …… 17
地球環境研究室　（教育学部） …… 18
太田ゼミ　（経済学部） …… 19
生体構造学講座小松研究室（理 学 部） …… 20
細胞工学Ⅱ井上研究室　（工 学 部） …… 21

留学生コーナー

留学生雑感 …… 22

トピックス

日本火山学会1993秋季大会 …… 24
北海道南西沖地震の震源海域における緊急潜航調査 …… 25
イベント「研究情報発進～夢大学～in TOYAMA'93～」 …… 26
全日本合唱コンクール全国大会（中学校部門）で2年連続「金賞」に輝く …… 27

学生部だより

冬山登山の事故防止について …… 28
スキー講習会（在来生合宿研修）のお知らせのコーナー!! …… 28
リーダー研修会を終えて …… 29

保健管理センターだより …… 30

キャンパスウォッチング …… 32

ヘルン文庫 …… 33

特集

「読書」

1　冊　の　本

附属図書館長
工学部教授　　藤　田　　宏

私は大学へ来る前，企業にいたことがあるが，当時の工場長の話で『会社はエキスパートが欲しい。エキスパートになるには経験も大切だが仕事に結びつく本を一冊でよいから完全に読み切ってみることだ』という言葉がとても印象に残っている。この言葉がきっかけとなって，一冊の生産技術に関する専門書を読み切ってみようと思った。理解できないところは他の何冊かの専門書で補うことになったが，読み切ることはいかに大変なことか思い知らされた。結局，この一冊の本のために多くの専門書を読まされる結果になった。この本は完全に読み切ることはできなかったが，この間にかなりの技術知識を得た。また，ものの考え方にも大きく影響を受けたように思う。

読書のきっかけや方法は人によって様々だと思うが，読書によって何らかの影響を受けることだけは確かなように思う。

目からうろこが落ちた本

頭の皮を（身ぐるみ）剥がれた インディアンたち

『米国先住民の歴史 ―― インディアンと呼ばれた人びとの苦難・抵抗・希望』
清水知久　　明石書店

人文学部助教授　大工原　ちなみ

昨年はコロンブスがアメリカ大陸を「発見」してから500年がたつというので，本国アメリカをはじめ，いろいろなイベントが計画されたようですが，先住民である「インディアン」の心情を考慮して中止されたものも多かったようです。私たちはコロンブスがなしとげた偉業については知っていても，その直接，間接的影響を受けて先住民の運命がどう変わっていったかという点になると，意外に知らないのではないでしょうか。先住民にとって，コロンブスや彼の後に続いた白人達がどのような存在であったのか，この本の中から一部紹介してみましょう。

コロンブスはわれわれに何をしてくれただろうか。彼はわれわれにまちがった名前をつけ，梅毒をくれた。インカ文明，アステカ文明の破壊の道を開いた。われわれを大農場の奴隷にした。われわれに対する皆殺し戦争の幕を切って落とした。われわれに呪いをかけて，貧困と早死に，誇りの喪失をもたらした。彼はわれわれの川を汚し，土地を盗み，女たちを犯し，われわれの間を引き裂いて，互いに対立させた。そしてコロンブスの後から来た者が，もう他に何もすることが思い浮かべられなくなってからは，われわれを観光客相手の見せ物にした。　　（本文37ページより）

西部劇などを通して，無防備でかよわい女性や子供がインディアンに襲撃されているところへ，カスター将軍などの白人の騎兵隊がさっそうと駆けつけ，間一髪命を救うという構図を繰り返し見せられているうちに，インディアン＝悪者・野蛮人というイメージが定着した人が多いのではないでしょうか。確かにインディアンが白人を襲った事実も多々あります。しかしそれは住み慣れた土地を追われ，絶滅を運命づけられた彼らの必死の抵抗であった点を考慮しなければならないでしょう。先住民である彼らは，白人が持ち込んだ天然痘やチフスなどの病気で多数の死者を出し（なんと天然痘の菌のついた毛布が意図的に部落に配られたこともあったという！），白人の襲撃で殺された上に，生殖器を切りとられて頭皮を剥がれ（あれ，頭皮を剥ぐのはインディアンのはずじゃなかったの？），西へと追われる「涙の旅」で半数が命を落とし，彼らの生活と切っても切り放せない野牛を絶滅に追いやられる等々，彼らの悲劇の歴史は続くのです。また彼らが独自に培ってきた文化を野蛮なものと否定し，誇りを喪失させた白人の罪も大きいでしょう。

この本を読んでいくと，これまでの襲撃者としてのインディアンが犠牲者に，また白人が加害者としての色彩を深めるのです。最近はだいぶ良くなったとはいえ，現代アメリカでも，先住民の生活水準は一般に貧しいといわれているアフリカ系アメリカ人よりも更に低く，貧困にあえぎ，教育を受けるチャンスも低いようです。また，うさを酒で紛らすためアルコール中毒患者が多く，自殺率も高く，このため15歳から44歳までの先住民の死亡率は全国平均の２倍近くなるというのです。

1992年のコロンブス500周年記念に続いて1993年が国際先住民年に指定されました。北米インディアンと日本のアイヌの交流も行われました。これを機会に，最も強い権利を持ちながら，人権を認められず，地理的社会的に押しやられていった先住民について理解を深め，人間が同じ人間の尊厳を損なうことの意味について考えてもらえれば幸いです。

目からうろこが落ちた本

『應響雑記』と氷見の空

『應響雑記』　　田中権右衛門

教育学部助教授　田　上　善　夫

終戦まもない頃に，氷見の素封家の蔵から大部の日記が見つかりました。『應響雑記』といい，田中権右衛門が文政十年（1824年）から，安政六年（1859年）にかけて書いたものです。権右衛門は若くして町年寄となり，豪商にして文人でもあったので，日記の内容は多岐にわたります。興味をひかれるのは，天気の様子が日に何度も記されていることです。「あゆの風」とか「しっぽり雨」などのゆかしい言葉が，数多く登場します。しばしば俳句や花の絵も添えられ，季節感にあふれています。

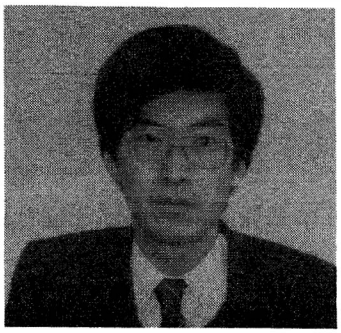
この『應響雑記』に出会ったのは，歴史時代の気候について調べている関係からです。権右衛門は「小氷期」や「エルニーニョ」などを知る由もありませんが，『應響雑記』に記された天気はそれらを知る貴重な手がかりになります。権右衛門は天気をていねいに観察し，豊富な語彙を用いて記し，そこに操作を加えませんでした。このように質の高いてがかりは，ほかには見あたりません。

内容を別にすれば，『應響雑記』のように天気の記載を含む日記は，世界に数多くあります。天気を記し続けるという至難なことが行われた理由については，満足のゆく説明はないようです。ただ，こうした日記は東アジアとヨーロッパとに偏在しています。気候を明らかにするには，世界の空を見わたすに越したことはありません。上記の他の地域にも天気を記した日記が存在し得るか否か見極めるためにも，天気を記す理由を知る必要があります。

『應響雑記』のように昼夜を分かたず天気を記し続けるには，よほどの事情があるように思えます。幸い権右衛門は，自らそのことにふれておりました。権右衛門は日記に記載すべき10項目を記す中で，天気を２番目にあげており，それだけ天気を重視していたことがうかがえます。さらに『應響雑記』という名称は，響の物に応じ，影のかたちに添うさまによるといい，日常のあるがままをその通りに記すことを自らに課していたようです。権右衛門が眺めた氷見の空に続く空を，同じように眺めていた人達がいたかもしれないという気がします。

目からうろこが落ちた本

読書の習慣について



経済学部助教授　飯　野　正　幸

「目からうろこが落ちた本」という題でということなのですが，私の場合，特に「この一冊」というものは思い浮かばないので，私自身の経験を踏まえて読書に対する考え方等を書いてみたいと思います。

私は大学院にいる頃から，自分のことやまわりの人たちの影響もあって，人生に対していろいろと考えるようになり，専門とは直接関係のない分野の読書をすることの意味を再認識しました。

ここで私なりに読書の意味を考えますと，人生における「学び」ということに触れざるを得ないと思います。どのような環境にあっても，どのような事件に出会おうとも，あらゆるものから教訓を学んでいく姿勢が大切であり，そのひとつとして，人間関係等の各人の実体験から学ぶということがあるでしょう。

次に，経験に加えて，読書による知識の学びがあります。これによって，物事を考える材料を得たり，著者の追体験をすることになります。ここでは，書物から得た知識をどのようにして実際に生かすかを考えていかなければなりません。

このように人生において，苦難等のあらゆることから学び尽くし，教訓を得ていくという姿勢からみると，読書をすることのひとつの重要性が理解されると思います。

別の表現をすれば，読書によって，物事の本質を見抜く力，認識力を高めるということになり，それが日々の生き方や心構えを考える上で大きな糧となっていくでしょう。

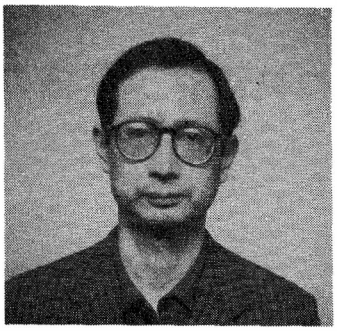
また，ひとつのテーマについて考え抜く態度を身につけることができると思います。自分が共鳴，共感できる内容を選び出し，それを材料にして，自分自身の考え方を形成していくことにつながります。

先人の知恵に学ぶということで，学生諸君には，文学，歴史はもとより，哲学，思想，宗教の古典をじっくり読むことを敢えて勧めたいと思います。たとえば，岩波文庫には時代を超えた価値ある書物が豊富にそろっていると思います。

最近の調査でも，日本人の読書量が減少しているようですが，一日に30分でも本を読む習慣をつければ，その蓄積は10年もすればかなりのものになるでしょうし，読書すること自体が楽しくなります。私自身も読書をとおして，心の糧を得，人生観を形成し，さらに発展させるように努力を続けたいと考えています。

目からうろこが落ちた本

ー すべての数学の本は読み辛いか？ ー



Деян. 9−18. И тотчас как−бы чешуя отпала от глаз его, и вдруг он прозрел; и встав крестился,

理学部教授　久　保　文　夫

私達，数学研究者は日頃自分の目からウロコを削り取って生きる定めです．従って自分の専門分野の本は何らかの意味で目からウロコを落としてくれるものです．その意味では表題のような本は色々あります．しかしそれを述べても興味を惹かれる読者は限られてしまい，このコーナーの主旨には沿わないでしょう．では，専門から外れてそのような本があったかというと，あるにはありますが，私にはまともな書評を書けそうもありません．そこで，別の意味で目からウロコと言える本を自分の専門に近い本の中から見つけました．

一般に数学の本は読み辛いと言われます．論理的に積み重ねて構成し展開される数学的理論を一目瞭然に書物の上に書き留めるのは至難の技です．それに加えて**数学することは一種のライヴ・ショウ**なので，活字になると多くは抜け殻同然です．数学の本を書く段になると，このことは痛いほどわかります．書いていることは考えていることのホンの一部です．翻訳書は言わずもがなです．「数学を書く」という作業がそのように微妙であるにもかかわらず，広い範囲の読者に内容をわからせると言う点で成功した数学解説書の例を挙げることにしましょう．数学を書く／説くにはこのように書け／説け，との**自戒を込めて**．

翻訳者の名前を麗々しく表紙に飾る不思議な邦訳の多い中，この本は慣例を破ります．

L．ニューワース　原著
このひもは結ばれているか
日経サイエンス社
1984，ISBN 4−532−06450−3 C0341.

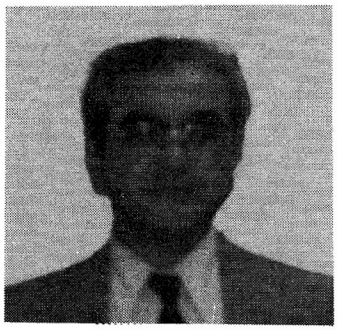
原著にもあるのでしょうが，表紙は「ひも」が複雑に絡み合ったデザインになっています．内容は「結び目理論（Knot Theory）」と呼ばれる抽象数字の一分野をたったの64頁で大人から中学生までに紹介するのを目的とするいわゆるポピュラーサイエンスです．

数学の他の分野に比べて結び目理論の目的意識が明確であることも幸いしています．その目的というのは，「**ある結び目と他の結び目は同じものか？**」などというものだからです．しかし，著者は安易にそれに寄り掛かりはしません．結び目の定義，結び目が同じものだという定義を具体的な結び目の絵を巧く利用してきちんと述べます．そして結び目を分類するのに最も肝心な「不変量（invariant）」という概念を紹介しています．

目からうろこが落ちた本

ー わが青春：断絶の時代の読書 ー

『夜明け前』　　島崎藤村



工学部教授　島　崎　長一郎

敗戦期から戦後の初期，私が中学生であった頃，私は島崎藤村『藤村詩集』を教科書ではじめて読んだ。無綴のまま配られた教科書を糸でかがって使うという，敗戦後の教育界の混乱期にこの抒情詩に出会えたことは幸運であった。藤村にとっては，詩は失われた何ものかの復興だったと思われ，私にとっても初めて出会った詩であった。詩の本質は当時の私には掴める筈がなかったが，戦後の無力感・倦怠感・挫折感の満ちた殺伐とした断絶の時代にはこの抒情精神が新鮮に感じられた。特に「千曲川旅情の歌」は，古き良き時代の無常観と日本的な自然観照との鮮烈な復活を感じさせる絶唱であると考えられ，私の好きな詩であり，当時よく口ずさんだものである。私の読書も藤村の詩から散文へと移行していった。その他，古今東西のあらゆるジャンルの文学書を読み漁ったが，最も感銘した本は『夜明け前』であった。『夜明け前』は日本文学の本格的な長編小説であり，視野の広い，奥深くて複雑な世界に，完全に私は魅了された。この長編小説は，藤村が，父正樹を主人公青山半蔵として設定し，幕末・維新の大動乱期に浮き沈みした悲劇的人物として捉え，人間と歴史とにわたって展開した歴史小説である。この作の中心舞台となったのは，中山道に沿う鬱蒼たる大森林のかげに，ひっそりと息づいていた小さな一宿駅馬籠である。ここに青山半蔵が生れ，目覚めたる者としての苦悩のかぎりを味わいながら，56年の生涯を，狂人として，座敷牢の中で閉じた人であった。この作は，明治維新を下から見上げ，たくさんの下積の人，世の中にあまり知られていない庄屋の人達の眼をとうしての大きな歴史の流れを克明に描いたものである。これは「草叢(くさむら)の中」から見上げて維新の実相を書ききわめようとする確かな視点を備えている点，私の断絶の青春時代に最も相応しいものであった。この小説は紀行文的要素もあり，旅行案内書としても優れた面も持っている。作品の中に描かれた碑，村落，道などの風物描写の写生文は絵画を鑑賞している気分にさせ私達読者を完全に魅了させてくれる面もある。

大作『夜明け前』は「木曾路はすべて山の中である……。」からはじまって，青山半蔵の寝棺を埋めるために墓堀りの男たちが鍬を打ち込むたびに，重く勝重のはらわたにこたえる鍬の響き「……一つの音の後には，また他の音が続いた。」を持って終わる。物語の登場人物が現在，生存していて会ってみたい気を起こさせ，随分と昔のことであるが，不思議な同時代的感覚で読みとおすことができる。私はこの小説を何度か読み直した末，この作品の中心舞台である馬籠を訪ねたいという思いをとどめることができなくなり，20年前にＳ氏と馬籠にいき，峠部落をへて妻籠へと旅した。木曾路の風物と土の匂いを嗅いで多感な青春時代に読んだこの物語の場面を垣間みることができた。

わたしの推薦図書

スフィンクス

アンヌ・ガレタ

新潮社

人文科学研究科
日本東洋文化専攻
1年　森　　洋　子

ある雑誌で特集したロード・ムーヴィーのヴェンダースのページでこの本を知りました。単行本の帯の，性別不詳の二人の謎めいた激しい愛――といった文句に忠実に，ヘテロあるいはホモのロマンスとして読まされるよりも，語り手の五感と第六感で綴られた一人称のこの物語は，語り手と共に彼／彼女自身を丹念に観察するのが面白いと思います。

語り手である「私」の日常的倦怠は，無意識下の不在の想念ゆえに決して満たされない喪失感にとりつかれた姿として自覚されています。言わば死を抱えて生きる「私」は，自らのアンチテーゼ的な絶対的生の存在である「A」との絆を得ることで自らの傷を癒そうとしますが，そこで投影されるのは「私」が喪失した「私」という存在への到達の遷延。「私」は「A」を虚構の中に押し込めたまま見失ってしまうのです。スフィンクスの謎とは？私は愛の不可能性と「私」という主体の死への帰着なのではないかと思うのですが…。

わたしの推薦図書

教育学部教授　野　村　　昇

寺田寅彦とその弟子達のように，科学者として一流であるだけでなく，その随筆が勝れている場合に，読者は次々と引き寄せられていく。夏目漱石の弟子であった吉村冬彦が物理学者の寺田先生である。

赤堀四郎先生とその弟子達の生化学領域における研究報告にもまた，別の意味での連綿と続く流れが読み取れる。

一人の大学者とその弟子達について探る方法は，目まぐるしく変幻する社会事情の中ではもうはやらないかもしれないが，読む本を探す結果として，その思考の経緯・師事人脈などについて深く理解することは意義があると思う。ドイツの大化学者エミール・フィッシャーとその弟子達，日本での西田幾太郎とその弟子達，真島利行とその弟子達などと，それぞれが，自分で興味をもつ分野での人物を中心とした展開について調べるように息の長い読書をすることは有益であると考える。

わたしの推薦図書

『すばらしい新世界』

オルダス・ハックスリー

講談社文庫

経済学部助教授　西　村　秀　二

生命の「誕生」と「終焉」をめぐる近時の科学による「神への挑戦」は，目紛しい。人工授精，体外授精，遺伝子組み換え，代理母，脳死，尊厳死，臓器移植など，枚挙に遑がない。だがそれは，「神」への挑戦であると同時に，「法（刑法）」への挑戦でもある。

誕生をめぐっては，「生みの親」・「育ての親」・「卵の親」の間で誰が親とされるかについて争いがあり（アメリカ），孫を妊娠したおばあちゃんが出現したり（アメリカ），弟を出産した姉も現れている（イタリア）。また，法が受精卵を保護しているのが母体の子宮への着床完成時以降であることをよいことに，提供者の同意も得ずに，遺伝子組み換え実験を医師が行ったり（日本），凍結受精卵を使う不妊治療を受けていた夫婦の離婚後，受精卵の取り扱いにつき争われたりしている（アメリカ）。

終焉をめぐっても，大脳死を脳死とみなし，植物状態患者からも心臓移植を行えるようにすべきだとする見解が主張されたり（アメリカ），臓器目的に赤ちゃんを売買する犯罪組織が摘発されたり（ブラジル），死刑囚の臓器提供を推進したり（台湾）と，まことに大混乱の状況にある。

人はいつから人なるか，いつから人でなくなるのか，こんなことを考えていると人類の行き着く先に不安をおぼえた。

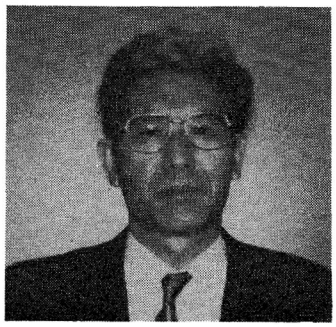
そこで，1932年に公刊された，オルダス・ハックスリー　著　松村達雄　訳　『すばらしい新世界』（講談社文庫，1974）を読んでみた。

わたしの推薦図書

『怠け数学者の記』

小平　邦彦

岩波書店

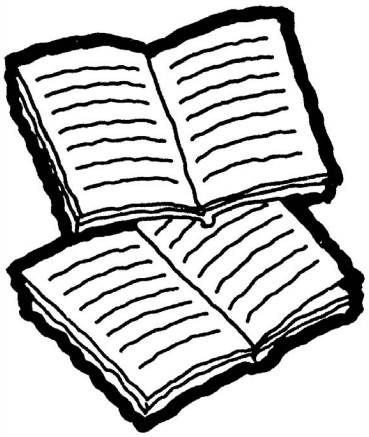


理学部教授　平　山　　実

先年，量子力学の初等コースを講義する機会があり，テキストに朝永振一郎氏の本を用いた。ところが，受講者全員が，朝永という名前は聞いたことが無い，と言う。湯川秀樹氏なら知っているだろう，と言うと，全員が，これも知らない，と答える。時代の変遷を痛感させられる一齣であった。湯川氏と朝永氏は明治生まれの理論物理学者，小平氏は大正生まれの数学者であって，30年前には，数学や物理学を志す若者にとっては，光り輝く存在であった。上掲の書には，小平氏が単身渡米中に留守宅に宛てた手紙や，エッセイ等が収められている。手紙には，時を同じくして滞米中の湯川・朝永両氏の暮らし振りや，小平氏が研究の進展と渋滞に一喜一憂する姿が綴られている。エッセイで述べられている興味深い見解を一つだけ記す：将来，人類の進化と共に数覚というものが発達し，現代人には難解とされている数学の定理も，一目瞭然，証明なしに分かるようになるのではなかろうか，云々。

わたしの推薦図書

わたしの携行本



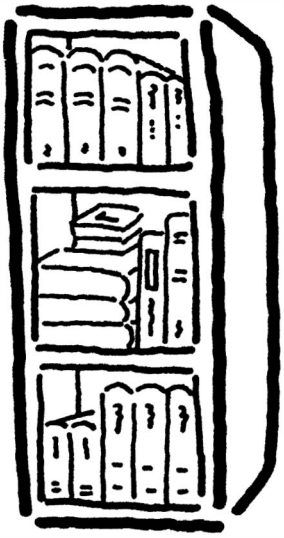
工学部教授　女　川　博　義

小学生時代に授業時間を利用して担任の先生に朗読してもらった『湯川秀樹博士』は少年時代の大きな心の支えになった。此れがきっかけになって，中学時代に国語の先生から博士が『ものみなの中に一つの則ありと日にけに深く思いいりつつ』と詠まれているよと教わったことも記憶に深く刻まれたのだろう。博士の少年時代には漢文講読や厳しい家庭教育があったことなどの断片的な記憶が蘇ってくる。私の中学高校時代にもっと読書に遊ぶ余裕があったら…と悔やまれる。中学時代前半には自作の詩を誉められたこともあったのにと。

受験勉強に追われた高校時代に得た読書にまつわる記憶は，歴史の先生からだったと思うが，デカルトが『方法序説』を，親鸞が『教行信証』を，その弟子達が『歎異抄』を編纂したということなどである。これらを読むゆとりはこの時代には到底無かった。しかし此れが，大学時代の悶々とした日々に野間宏著『歎異抄』や吉川英治著『親鸞』などを読むきっかけになった。出張の際に今でも，手垢でカバーが変色した『歎異抄』と『親鸞（文庫本）』を携帯することがある。前者は筑摩書房－私の古典シリーズ中の１冊である。これらの２冊が車窓の景色と織り混ぜて読み返すというより眺めるには手ごろなセットになっている。

ごく最近，同僚教官に「目から鱗…」の原稿執筆を依頼しに行って，逆にこれを読めと渡されたのがＣ．Ｊ．サイクス著　長沢光男訳　化学同人発行の『大学教授調書』である。我が身のことを書かれているような箇所が多々ある。しかし，小生の学生時代から思い続けてきた教養部の在り方に対する疑問に，我が富山大学が回答の１例を提示しつつある。その作成作業に当時とは立場を異にして少し係わっている今，目からうろこが落ちたかは別にして感慨深いものがある。

読書のすすめ



富山大学生活協同組合理事長
工学部教授　葛　　晋　治

寒いですが，読書やスポーツなど何をしても充実した時間が過ごせる季節になりました。最近は種々の調査によって人々の読書離れが目立つとも言われ，殊に学生の読書時間，読書量が減っていることが指摘されていますが，一方，私が近くで見ている何人かの学生諸君について言えば，必死に必要な書物を探し回る人達がいたり，広い関心をもって心当りの本をいろいろ通読する人達もいたりしますので，人数はともかく，真に書物を必要とする若者がいることを頼もしく思う気持になっています。私自身はと言えば勤勉に読書をする習慣もないので，読書について論評する資格は無いのですが，何とはなしに溜まってしまった知識から言うと，日常の読書について幾つかの視点を持っている方がよいと思われます。第一は，当然のことですが，自分が現在何に関心を持ち，どんな傾向の本を読んでみたいのか，漠然とでも振り返ってみること。第二は，過去の読書について思いを巡らして現在の自分にどう関わっているかとか，もう一度違った角度から読み直してみたい本がないかなどを省みること。第三は，近い将来自分に関わりのありそうな，あるいは，もう少し先になって読みたくなるであろうと思われるような本をそれとなく見積っておくこと。以上は，読書をする人ならば無意識のうちに実行していることですが，若い人々には第三の視点をも忘れず意識していて欲しいと，私は願っています。職業の選択や，広義には自身の未来のあるべき姿に深く関わることだと思うからです。今は，情報の伝達手段は書物だけでなくなり，音声，映像も溢れていますが，原型としての印刷物は量において相対的に減ることはあっても，重要性を減ずることはあり得ないだろうと思います。音声や映像の長所を十分に活用しながら，他方，量によって薄められた現今の出版文化の中にあっても，自身の現在と未来にとって真に必要と思われる書物を適確に選び出して活用する英知を，若い人々が持ち続けて戴ければ幸いです。充実した学生生活をおくられるよう願っています。

'93 10月度(10/1～10/30)書籍ベストセラー

富山大学生活協同組合書籍部本店調べ

①	「私は別人(上),(下)」	シドニー・ジェルダン	アカデミー出版
②	「マーフィの法則」	アーサー・ブロック	アスキー
③	「全国アホ・バカ分布考」	松本　修	太田出版
④	「アルジャーノンに花束を(上),(下)」	ダニエル・キイス	早川書房
⑤	「マティソン郡の橋」	ロバート・ジェームズ・ウォラー	文芸春秋
⑥	「完全自殺マニュアル」	鶴見　済	太田出版
⑥	「パプリカ」	筒井康隆	中央公論社
⑥	「大学は変わります」	鷲田小彌太	青弓社
⑨	「お役所の掟」	宮本政於	講談社
⑨	「富山食通本」	タウン情報とやま編集部	C・A・P
⑨	「一目でわかる日本許認可制度のすべて」	依田　薫	日本実業出版社
⑨	「満足の文化」	J・K・ガルブレイス	新潮社

’93 10月度(10/1～10/30)雑誌ベスト５

富山大学生活協同組合書籍部本店調べ

１．週刊少年ジャンプ

２．ｎｏｎ － ｎｏ

３．週刊少年マガジン

４．ザ・ＴＶジョン 富山・石川・福井

５．オレンジページ

平成４年９月〜10月実施　第28回学生の消費生活に関する実態調査
（全国大学生活協同組合連合会主催）

本代は増加している…

書籍部への来店回数や読書時間のダウン傾向が見られ，生活費の中の書籍代のみは±０というなかで，１カ月の本代（書籍＋雑誌）はどうなのだろうか。

雑誌代

最近１カ月間の雑誌代は平均で前年より110円増の1,760円と，前年にひき続き増加傾向を示している。

雑誌を１冊も購入しなかったものは20%で，これも例年と変化がなく，購入金額の分布もほとんど変らない。

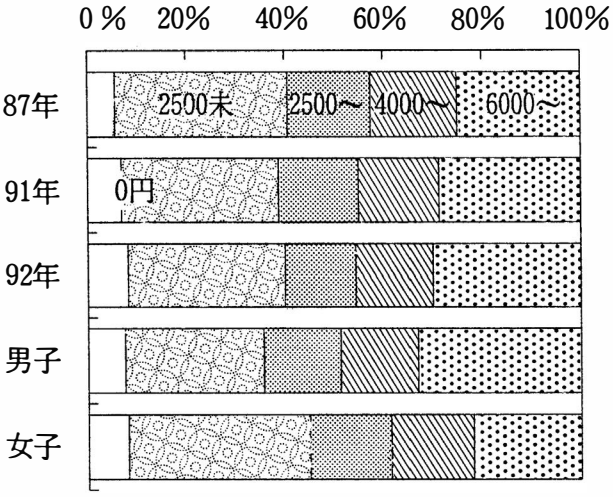
性別では男子2,000円に対し，女子1,250円と例年のとおり相当の差が出ている。また，地域別でみると面白いことに，次項の書籍代では国立＞私立の関係だが，雑誌代では私立＞国立の関係が特徴的だ。

書籍代

約10年間にわたって減少を続けていた１カ月の書籍代は’90年を境にほんのわずかづつだが増加傾向を示し，’92年も平均で190円・5.4%伸長した3,720円となった。金額的には回復とみたいが，５〜６%の上昇率では，本の価格がジリジリと上昇している今，１冊当たりの単価と比較すると購入冊数ではたぶん±０だろう。

１冊も購入しなかったものは28%，この比率もほとんど変化はないが，３割近い学生が１冊も購入していない現実はどうなのだろうか。本からの刺激や情報よりもっと他からの方に重きがおかれているのだろう。

１ケ月の書籍代



合計で300円増加

これらの双方を合計してみると，平均は前年比5.8%300円増の5,480円。さすがに最近の１カ月間に本も雑誌も購入しなかった学生は７%にすぎない。

気持ちはあるが伸びない読書時間

生協利用は…

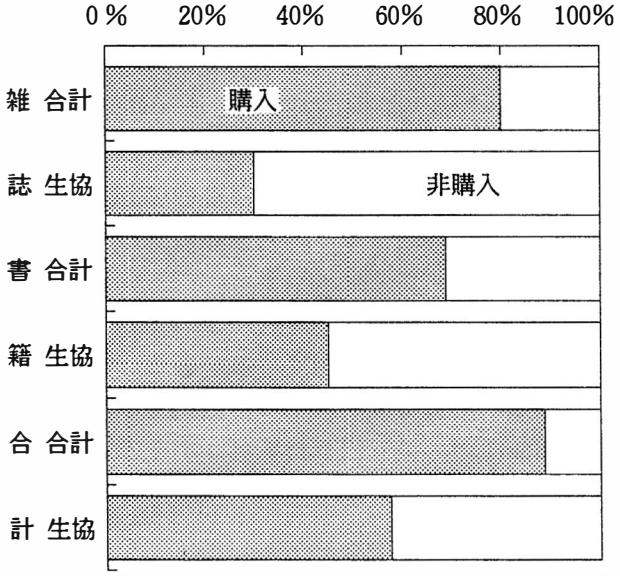
こうした本代のうち，生協の利用率をみよう。雑誌代は前年より10円ダウンの410円になる。この雑誌代の生協のシェアは23.3%にしかならない。したがって67%が生協では１冊も購入していない。（うち22%は雑誌そのものを購入していないのでマイナスすると45%，これは購入者を100とすると60%）

書籍代では前年より80円3.9%伸びて平均2,110円。しかし，ここでも55%がこの１カ月間に書籍を１冊も購入したことはない。（うち28%は非購入者なので27%，したがって購入者を100とすると40%）金額でのシェアは，雑誌代をはるかにこす56.7%になる。

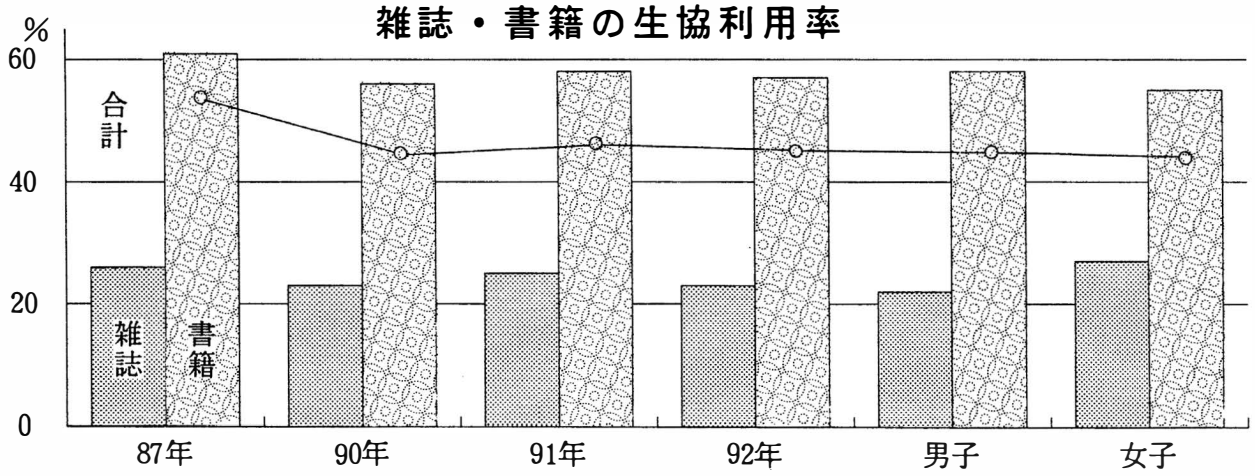
雑誌マイナス，書籍プラスの合計でみると前年より2.8%70円増の2,520円になる。生協を全く利用しなかったのは42%（ただし，ここでも７%の非購入者を引くと35%，購入者を100とすると41%）で平均額のシェアは46%になる。

地域別でみると合計の金額差も大きいが生協利用金額の開きも大きい。しかも本を購入するチャンスからみると，大書店が軒を並べる大都市私立はどうも分が悪いが，この点地方国立大の生協利用率は55%を占める。こうした利用率にはそれぞれの学生気質もあるが，書籍部の施設のありように大きくかかわているのではないか。

１ケ月の雑誌・書籍購入率



雑誌・書籍の生協利用率



私の研究室

日本言語文化研究室

（人 文 学 部）

日本言語文化コース
4年 杲（ひので） 由 美

我が日本言語文化研究室は，院生を含め男子８名，女子54名，計62名の完全な女所帯である。だが男子は頭数の少なさを補って余りある強烈な個性の持ち主ばかりなので，その点バランスはとれていると言えよう。女子が多いから，さぞ華やかだろうと思ったらこれがとんでもない誤解で，男子はアゴで使うし，人の出入りが激しいため部屋は荒れ放題である。ここに来たばかりに女性に対する憧れも理想もふっとんだ男子学生は過去一人や二人ではないはずである。

もちろん日本言語文化の女子学生が元々そんな性格なのではない。教官に感謝されてもいいんじゃないかと思う程みんな性格はいいし美人も多いのに，彼女達がいつも掃除やお洒落ばかりに現（うつつ）を抜かしていられないのは，ひとえに演習や講読の発表準備が大変だからである。

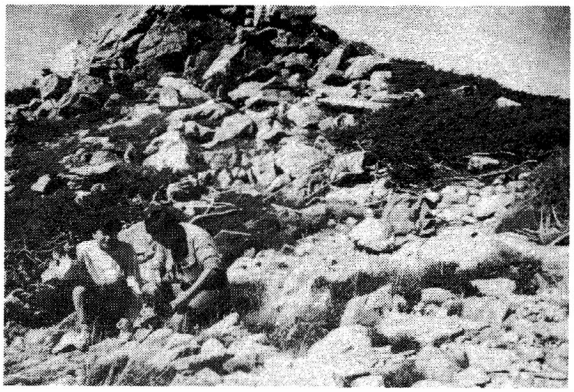
国文といえば扱う資料は日本語だから他コースより楽だと思われがちだが，大間違いである。外国語のハンデがない分，余計に教材や資料の熟読・熟考が要求される。かつて，まずいレジュメを作ったため，学生の目の前でそのレジュメを破り捨てた教官がいたといううわさもあり，その苦労は他コースでは味わえないものであろう。教官が席に着いているのにまだ別室でレジュメ作成中という暴挙に出た者もいるし，発表が重複した日には演習室での徹夜は必死だが，同じ経験をした者同士，学生の連帯感は大変強い。

当研究室の特徴は，教官と学生の親しさ（馴れ馴れしさとも言う）にもある。卒論合宿や方言合宿では寝食を共にし，講義後飲み会になだれ込む事もよくある。酒席では双方いつもに輪をかけて言動が異常化するので，翌日は疲労のためみんなぐったりしている。以下，僭越乍ら教官の紹介をさせていただく。

山口教官（近代文学）…中文への対抗意識は只事ではない。　田村教官（中古文学）…学究肌とは先生の為の言葉だと思う事もある。　二村教官（近世文学）…趣味で講義をしていると某教官から妬みの声が。高座が似合う。　斎藤教官（方言学）…喉かわいたねと言われたらすぐ酒を出す事。

小助川教官（訓点語）…人文一のダンディとアタックNo.１がなぜ結び付くのか謎は多い。

以上５名の教官と学生の結束，研究に対する珍奇，いや真摯な態度により，当研究室の未来は明るいと確信するものである。



研究室紹介

地球環境研究室

（教 育 学 部）

情報教育課程
環境情報コース
4年　坪　野　直　樹

我々の研究室は情報教育課程の一研究室として存在しています。しかし，その研究の内容は社会一般にいわれる情報科学に関係するものではなく，むしろそういう物からは離れているものとなっています。ここでは主に地球科学を中心として地球環境を考えることがおもな研究内容となっています。だから，コンピュータを使わなければ，使えなければならないといったことはありません。しかし，コンピュータは無限の可能性を秘めた道具であり，これを使いこなせるとすれば研究がより発展していくというのもこれまた事実であり，今後の課題となっていくでしょう。正直なところ，この私も2年半の専門課程の授業でコンピュータを学んだ今でも，コンピュータをワープロぐらいとしてしか使用できておらず，自分の勉強不足を痛感しています。

しかしながら，本来，人間の五感を通して入ってくる外界のありとあらゆるものが情報なのです。そういう視点から見ると，我々の研究している地球科学というのは，地球が発している情報を受けとって，解釈を加え，わかりやすく人々に知らせることなのです。という風に堅苦しい話ばかりになりそうなので次に実際の研究室の様子を紹介していきたいと思います。

現在，我々の研究室には指導教官の宇井啓高教授のもと4年生4名（内1名休学中）3年生1名が所属しており，正に少数精鋭？の集団となっています。普段のゼミの時は各自が，自分の興味ある分野の論文を講読し発表しています。その分野は多岐に渡っており，環境問題（水質，大気等），断層，火山についてと色々です。更に各自の卒業研究はフィールドワークを中心とした研究であり，各自が連日フィールドへと研究に出かけています。一たびフィールドの楽しさ？を知ってしまえば後は病みつきです（本当かどうかは定かではない）。道なき道を歩き，薮をかき分け体じゅうをやぶ蚊に刺され，崖をよじ登り，岩を割る，何と楽しいことでしょう。そういう苦労をして，新しい発見をしたときや，普段何気なく見逃してしまうような小さな自然を見つけたときの喜びというのは何事にもかえがたい貴重な体験です。一日中研究室にこもって研究するのではなく，秋晴れの空の下で自然に触れながら研究を行うのはとてもすばらしいことだと思います。

我々，地球環境研究室の精鋭（よくパチンコ屋で見かけるという説もあるが）はこうして日夜研究にいそしんでいるのです。

太　田　ゼ　ミ

（経 済 学 部）

4年　九　谷　博　之
佐　藤　慎　也

我が太田ゼミは，各々個性の強い面々ばかり3～6回生合わせて26名が在籍しています。このような学生の面倒を見てくださっている先生はなんと懐の深いお方であろうかと思わざるを得ません。

先生を持ち上げるのはこの辺りでやめにして，ゼミの研究内容を紹介しましょう。我がゼミは，“生産システム論および経営情報論”という経営学の一領域を研究しています。ゼミの進め方は，3年生では日本語と英語の文献を輪読し，全員がプレゼンテーションを行ないます。プレゼンテーションは先生が最も重点をおいておられることの1つであり，社会に出てから必ず役に立つと確信しています。そして，4年生になると，これを基礎として，学生の自由で“失敗しても良いから独創的な”テーマで，卒業論文を作成することになっています。

さて，そろそろ我がゼミのメインである（？）課外活動について述べましょう。まず手始めに，ゼミに入ると新歓コンパが待っています。コンパといってもちょいとそこらのコンパじゃありません。先生の大好きな温泉での一泊大宴会です。3年生は，先生と4年生以上からの大洗礼（アルコールの和洋折衷）を受けます。この時点で3年生のほとんどが「太田ゼミに入ってよかった」と思うようです。暑くなり蝉が鳴き出す頃になると，さなぎだった3年生も脱皮し，自主的に夏合宿を企画するようになります。夏合宿では，日頃研究でお疲れの先生に心身をリフレッシュして頂くため，テニスコートを這いずり回って頂きます。食欲・酒欲の秋も深まると，ＯＢ会があります。ここで太田ゼミの真面目な一面を垣間見ることができます。ＯＢ会の目的は，ＯＢと現役生との親睦を図ることにあります。ＯＢから社会人の本音を聞くことができ，就職に関しての意思決定を現役生に促してもらえます。ＯＢ会はそういう意味で，非常に重大な意味を持つイベントです。先生の愛車のタイヤを極一部のゼミ生がスタッドレスタイヤに交換し，スキーキャリアが車に装着されるのを見計らうように，スキー合宿が計画されます。先生はスキーが好きで（洒落じゃないよ！），夏合宿の恨みを晴らすかのようにゼミ生をゲレンデへと連れだします。以上のように，四季を通じてイベントが多くあります。

これでみなさんに太田ゼミの実態をご理解して頂けたと思いますが，最後に太田先生について少し触れておきます。これまでのエピソードから察する通り，先生の趣味は，研究が大部分なのですが，若い学生に負けず劣らず，スポーツ好き，車好き，温泉好き，そして人格を占うことだと思っております。

生体構造学講座　小松研究室

（理　学　部）

理学研究科生物学専攻２年
川　合　美貴子

生物学と聞きますと，最近のテレビや新聞などの影響で，バイオテクノロジーを駆使して研究するものだと考えていらっしゃる方が多いと思います。または，直接的に私達の生活に関係があることを発見するものと思われている方もいらっしゃることでしょう。実際にそういう研究が盛んになりましたし，また重要ですが，別の面の研究も必要で，研究することはたくさんあります。

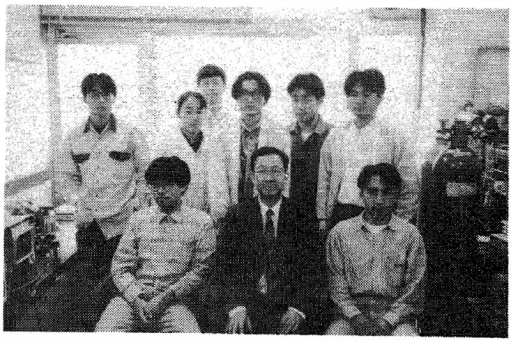
私達の研究室では，棘皮動物，特にヒトデやナマコを材料とし，形態及び発生を観察しています。そして，その結果を系統学的に考察しています。これだけですと，よくわからないと思いますのでお話しします。あるヒトデが海から採集されたとき，このヒトデの種が何で何の仲間かということをまず，調べます。それにはヒトデの骨や棘の形等の外部形態を観察し，解剖して胃や消化器管、生殖巣等の内部形態を調べます。さらに，このヒトデの生殖期がいつであるかを明らかにします。そのために１年を通じて定期的にヒトデを採集し，生殖巣の発達状態を調べます。この時点で初めて，このヒトデを他の実験に使うことができるのです。つまり，何かの実験，研究にこのヒトデを使うためには何科の何という種であり，いまがどのような状態にあるかを把握しておく必要があるからです。その後でどのように扱うかは研究する人の目的によってさまざまです。

現在，この研究室にいる学生は修士２年生が１人，１年生が１人，そして４年生が２人の計４人です。先生をはじめ全員が女性です。ある学生の研究を紹介します。彼女は人工受精により，卵から稚ヒトデまでの変態を通してのヒトデの発生の全過程を観察しています。彼女の研究材料は，以前に東京湾で貝の養殖に大きな害をもたらした紫色の，全体の直径が20～30㎝の大きなヒトデです。このヒトデの発生を観察することによって，この種がどのような条件で増殖するか，あるいは生存できないのか，さらに異常繁殖を防ぐためにはどうすればよいのかが考えられます。他にもヒトデが主に移動のために使う「管足」といわれる器官の構造について調べている学生，口が無いヒトデの幼生に消化管があるかどうかを観察している学生がいます。また，ある学生は幼生を胃のなかで哺育するヒトデの生殖と発生について調べています。

このように，直接的には私達の生活に役立たないように見えますが，実際には水産学的に重要な問題も扱っています。ヒトデ類とナマコ類を材料にして，形態と発生の面から棘皮動物の進化を研究しています。これは純粋に科学的に重要なことであり，多くの注目を浴びております。

細胞工学Ⅱ　井上研究室

（工　学　部）



化学生物工学科
4年　大　上　光　明

現在，井上研究室は，井上先生，佐山先生（佐山先生は現在アメリカに出張中で，来年6月に帰国予定）がおられて，学生は院生3人，4年生4人が所属しています。院生は旧学科，工業化学の時から井上先生についておられて，主に触媒化学の実験を行っています。4年生は学科も新しく化学生物工学科となり，バクテリアを使った実験を行っています。ここで，4年生の行っている実験の1つを紹介します。これは，炭化水素を付加価値の高い酸素化合物に変えるためのものです。

まず，実験はバクテリアを採集するところから始まります。バクテリアの採集といっても，これは外に出て人里離れた場所から野生種の居そうな土を取ってくるだけです。その土を水でといて寒天培地に薄くまいてやると，一晩でバクテリアがコロニー（細胞集落）をつくり，色々な仲間が分かれて肉眼で見える様になります。そして，そのバクテリアの中に，なにか役に立つやつはいないか，生体触媒として使えるやつがいないかどうかなどを化学反応と分析機器を使って調べています。井上先生がおっしゃられるには，1つでもいいバクテリアがいれば，安全で省エネ型の化学工業に利用出来るのだそうです。それを夢みて実験に励んでいます。

さて話は変わりまして，井上研究室に入ってくる学生は，研究内容もさることながら，井上先生の人柄にひかれて入ってくる学生がたいへん多いのが特徴です。井上先生はあのとおり笑顔ニコニコたいへんやさしい先生です。そういう先生の下に集まってくる学生も，素直なよい学生ばかり？で和気あいあい楽しくやっています。天気の良い日にはテニスをする時もあります。時には先生も一緒にやられます。そこで私たちは，先生の年齢を感じさせない動きに驚いてしまいます。先生は卓球も上手で，まだ誰も先生に勝った学生はいません。あと，夏は旅行にバーベキュー，冬はスキーと行事がいろいろあり，息ぬきをたまに入れながら実験ができるという良い環境になっています。息ぬきと言えば飲み会もちょくちょくあり，井上先生も「月に一度はみんなで飲もう！」とおっしゃられるくらい飲むことも好きで，飲んだ時には笑顔を一まわり大きくして，いろいろな話をして下さいます。

なんだか遊んでばかりのようですが，決してそうではなく，「やる時はやる」という感じで，春のソフトボール大会もみごと準優勝に輝きました。あとは実験結果をしっかり出そうと実験に励んでいる井上研究室であります。

留学生雑感

留学生コーナーに寄せて

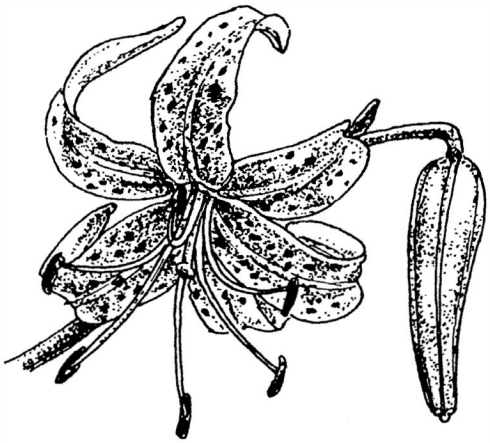
経済学部留学生専門教育教官
講師　村　上　　剣十郎

私が富山大学経済学部に赴任して以来はや半年が経ちました。その間，奨学金の相談や学費免除の推薦書などに関する面接等で受持ち以外の留学生と接する機会も多く，教えたり教えられたりで学ぶべきことも多いが，逆に彼らに留学の動機や目的を聞いてみて共通して感じ取られる問題点もないとはいえない。

それは彼ら留学生が故国を離れて遥々日本まで留学に来た理由はと問うと，一様に日本の先進な科学技術を学びたいとか実質世界ナンバー1の経済力を誇る日本企業の経営戦略を知りたいという「実直」な答えが帰ってくる。彼らが日本に降り立って初めて目にする超高層建築や時速270キロの新幹線・縦横に走る高速道路，氾濫するモノと情報の中では，これも致し方のない事なのかもしれない。しかし，彼らが目にし驚きや興味の対象となっているのは果たして本当の日本の「姿」なのだろうか。果たして自動車製造の技術や経営の知識を持って帰るだけで彼らの「目的」は達せられるのだろうかという疑問がある。確かに優秀な技術や管理のノウハウは現代日本を支える強力な財産であるには違いない。しかし，学ぶべきはそれだけだろうか？果たして一体何がそれらを生み出したのか，「それ」を知らない限り例えモノを持ち帰っても本当の留学にはならないのではないかと思われる。

そんな中で私が常々感じることは文明と文化の違いである。物質文明はその段階において進遅・優劣の差はあるが，固有の文化には質的な「違い」はあっても優劣の差はない。そして，この文明に属するものが上記のモノであるとすれば，文化に属するものはそれを支え生み出した「こころ」である。だから真にその国の生産技術や管理ノウハウを知りたければ，それを生み出すに至った過程ともいえる心的な文化的背景を知る必要があるのではなかろうか。逆に言えば文化なき文明論ほど不毛なものはないと言える。

例えば野山を歩いていて美しい山百合を見かけたとする。そして，それが欲しくなったらどうするだろうか？大抵の人はその花を折り取ってわが家の花瓶に生けるであろう。しかし，今咲いているその花の美しさは果たして何年もつだろうか？何年どころか一月ももつまい。せいぜい永くて2週間というところであろう。今は美しく咲き誇っ



ている花弁もやがては一枚散り２枚散って最後には挿しておいた茎も枯れ果てる。生け花をした人なら誰でも経験する花の命の儚さである。ではその花を花瓶ではなくて庭に挿したらどうだろう。やはり同様に数週間で枯れ落ちる。ではどうすればその花を毎年毎年自分の家の庭に咲き続けさせることが出来るであろうか。答えは花ではなく「根」である。即ち，持ち帰るべきは美しい花ではなく，土の中の百合根を持ち帰ればよい。その為には手で土を掘り，指を汚しながら土塊を相手に百合の花の観賞とは程遠い無粋で于遠な作業をせねばならない。そのために土が爪の間に入ったり，或いは埋まっていた小石や草の根に指を擦られて手に傷を負うかも知れない。しかしそうして持ち帰った根が自宅の庭に植えられ，一旦そこで根付けば来年からは毎年のように美しい花を咲かせてくれるに違いない。ここでいう百合の花が物質的な文明の開花とすれば，根に当たる部分がその文明の土壌を支える文化であることは言うまでもない。即ち，花を手折りて花瓶に突き差すのは容易であるが，その花を真に自らのものにするには，より本質的な根の部分を移植する必要があるのである。土に塗れた球根は花と比べれば美しくもなく，取り立てて興味の対象とはなりえぬ存在かも知れない。しかし，その中には新たな文明を生み出し，育み，開花させるあらゆる生成的な要素が質実しているのである。つまり made in japan の製品が優れているとすれば，それは長年湿潤な歴史的な風土によって培われた欧米にはない季節に対する微妙な感性，更に物事を緻密に観察し表現しようとする繊細な感受性が支えているからに他ならない。

だから日本の科学や先進技術を学びにきた留学生諸君，技術や経営ノウハウを学ぶもそれは結構。しかし，本当にそれらを持ち帰りたければそれを養い生み出した日本の精神的文化をも見忘れない様に心掛けてもらいたい。留学生諸君の中には往々にして自国にはない先端技術や満ち溢れるモノに目が奪われがちとなり，一方でそれを生み出したココロにまで「心が行き届かない」者が多いことも確かな事なのである。

即ち，木を見て森を見ずとは言うが，くれぐれも花を見て球根を見ずということにはならぬよう気を付けて頂きたいものである。

トピックス

日本火山学会1993年秋季大会

立山における現地討論会

理学部助教授　氏　家　　治

皆さんは富山県内に火山があることを知っていますか。実は北アルプスの立山（厳密には弥陀ガ原）と鷲羽岳～雲の平は火山なのです。必ずしもそうだからという訳ではありませんが，10月４日（月）から８日（金）の間，富山大学で日本火山学会が開かれました。前半の３日間は全国から集った研究者が最新の研究成果を発表する一般講演会で，後半の２日間は立山（弥陀ガ原）火山での現地討論会でした。また大会前日の10月３日（日）には，一般市民向けに“自然災害－火山と地震”と題する公開講演会が富山市科学文化センターで開かれ，テレビでおなじみの伊藤和明会員（文教大学・ＮＨＫ）他の講演が行われました。

本学会はありとあらゆる手法で火山を研究しようという世界唯一の学会で，参加した会員の専門分野は物理学系，化学系，地質学系など多様でした。また講演のテーマも，特定火山の地質とか噴火史の記載のような具体的なものから，マグマの粘性についてのコンピュータによる数値実験のような一般論まで，これも多岐にわたりました。

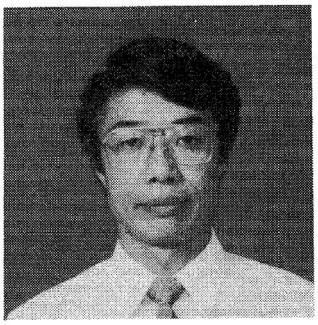
本学会は防災という点で社会との結び付きの強い学会です。富山大会でも多くの参加者が報道関係から取材を受けたようです。特に雲仙火山の噴火活動の今後の予測についての発表には，新聞やテレビなどの記者が多く詰めかけました。さらに会場には，会員以外の市民の姿もありました。

本大会では，意識的に特集を組んだわけではありませんが，現在活動中の雲仙火山についての発表が多く（全講演数の23％）行われました。雲仙火山関係に次いでは，北海道（12％）と雲仙を除く九州（10％）の火山についての発表が多く，またフィリピン，インド，メキシコ，海洋底など海外の火山や火山岩についての講演（８％）も行われました。

現地討論会では，２日間のうちの１日が雨で天候には恵まれませんでしたが，“立山カルデラ”，みくりが池，地獄谷などを見学し，それらの成因や火山地形と氷河作用の関係などについて熱っぽい討論がなされました。

富山大会を振り返ってみると，関係各位から暖かいご助力をいただいたおかげで，一般講演会，現地討論会そして公開講演会のすべてがまずまずの成功を収めたと思われます。道に迷ったという電話を外国人参加者から受けて，アルバイトの学生や大会本部員が学内・学外を走り回るというハプニングもありましたが……。

北海道南西沖地震の震源海域における緊急潜航調査

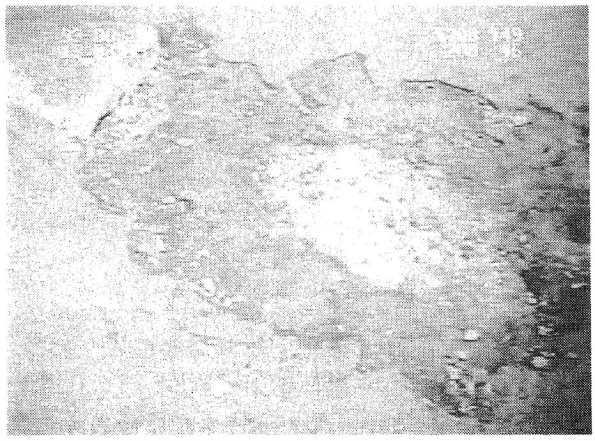


理学部助教授　竹　内　　章

悪夢から1カ月。来る日も来る日も廃材を燃やす煙が，遺り様のない悲憤が漂う青苗の西海岸から幾筋も立ち上る。盂蘭盆が開ける8月16日，私は奥尻島青苗岬から南西の沖合約9㎞の海底にいた。いつもより濁っていて「しんかい2000」の観測窓からの視界は5m以下。谷筋では所々にカイメンやベニズワイの死骸が鉄板などと一緒に掃きだめになっている。斜面では真新しい地割れがあちこちに傷口を開けている。

南北に長い奥尻海嶺は深海平坦面（日本海盆，水深3500m）からアルプスのようにそそり立つ。その尖峰が奥尻島，ウニ・カニの漁場として有名だ。海嶺の西麓でマグニチュード7.8の北海道南西沖地震が発生し，島は津波と火災による甚大な被害をうけた。急遽この震源域で6回の潜航調査が行われることとなり，私に先発が任された。実は，無人深査機による事前調査に基づく安全検討委員会で，M7級の余震による海底土石流の発生や，カニ籠のロープに絡まる危険性が懸念されていた。幸い，一連の潜航調査は無事に遂行され，学術的な成果は予想以上であった。

今回の津波を生じた地盤変動として，まず(1)海底地下での液状化を示す噴砂痕（写真）やトコロテン式に押し出された泥塊群も発見され，それらの配列は地震を起こした地殻応力が東西圧縮であることを示していた。(2)多数の大規模斜面崩壊とクレバスの発生と，(3)地盤の膨れ上がりという形の地震断層も確認された。海底の地震断層が地震直後に詳しく観察された例は世界でもめずらしい。

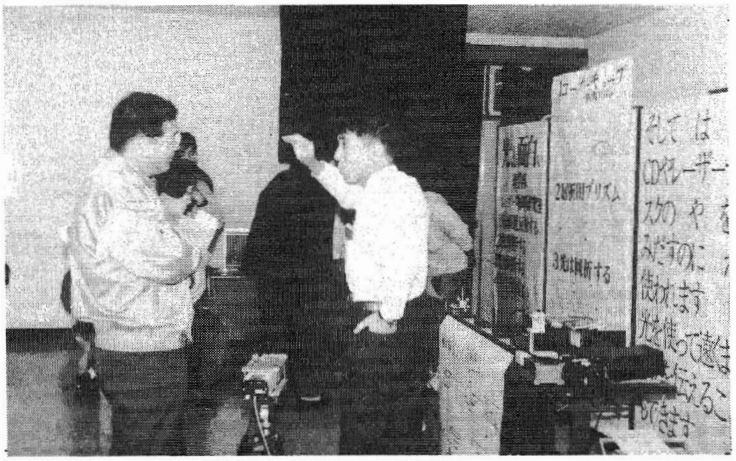


写真説明：170気圧の高圧下で生じた噴砂痕
（海洋科学技術センター提供）

日本海東縁は生まれたてのプレート境界とされ，富山深海長谷や飛騨山脈の成因とも切り離せない。この巨大断層に沿って最近の50年間に4つの大きな津波地震が発生したことになる。地震は防げないにしろ，防災対策のために次に起きる場所だけは事前に特定しておきたいものである。

ところで印象に残ったのはクレバスに落ちたカニである。それも1，2匹ではない。必死に崖を登ろうとするが，如何せん，この懸崖は軟泥の壁だ。身ひとつ分登ったかと思うや否や足がかりが崩れてしまう。今頃どうしているものか。日本海側の食卓は蟹の季節を迎える。

イベント「研究情報発進～夢大学 in TOYAMA'93～」

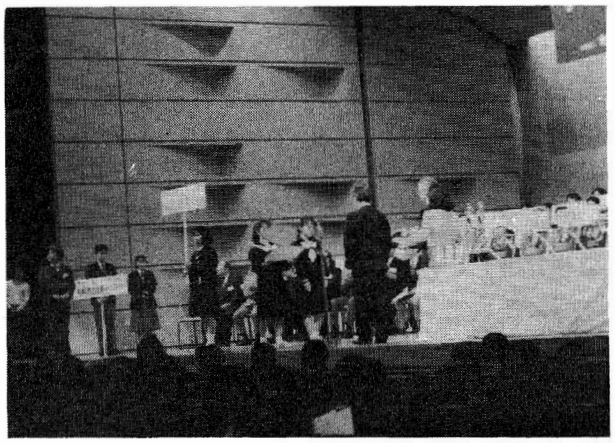


地域共同研究センター長
工学部教授　龍　山　智　榮

本イベントは，大学開放の一環として理工系の研究紹介を中心に行った。高校生を始めとする若い世代には理工系の研究に夢を持ってもらうこと，企業技術者に対しては今後の研究交流の進展の弾みとしてもらうこと，地域社会の一般の人々には日頃疎遠な大学に足を運んで，富山大学の実状を理解してもらうこと，を目的とした。地域共同研究センターが企画し，参加部局は，工学部，理学部，教育学部，低温液化室であった。イベントの内容は，講演形式の研究紹介と，小実験や実演を兼ねたパネル展示形式の２つの形式とし，合計31テーマであった。各出展の実施担当者は，素人にも分かりやすいようにそれぞれ工夫を凝らし，入場者には非常に好評であった。入場者数は，およそ500名程であったが，幅広い住民層の参加が得られ，概ね初期の目的を達成したと考えている。このようなイベントは今後も継続的に開催していくことが重要であると考えられる。

教育学部附属中学校

全日本合唱コンクール 全国大会（中学校部門）で 2年連続「金賞」に輝く



本学教育学部附属中学校コーラス部は，富山県代表として10月31日（日），大宮ソニックシティ大ホール（埼玉県大宮市）で開かれた第46回全日本合唱コンクール全国大会中学校部門，第3回全国中学校合唱コンクール全国大会（全日本合唱連盟，朝日新聞社主催）に，一昨年，昨年に引き続き出場しました。

同コンクールでは，全国各地から推薦された49校が磨きあげられたハーモニーを披露するなかで，附属中学校コーラス部は今回も見事「金賞」に輝きました。なお，一昨年は「銀賞」，昨年は「金賞」と「文部大臣奨励賞」を受賞しており，3年連続の栄誉となりました。

附属中学校コーラス部は，69人編成の混声合唱団で，堀江英一教諭の指揮，海老原あゆみさん（3年生），中沖いくこさん（3年生）の伴奏で，「II OH MY SOLDIER」（作詩：鶴見正夫／作曲：荻久保和明）と「聞こえる」（作詩：岩間芳樹／作曲：新実徳英）の2曲を歌い上げました。69人の合唱団は出場校の中でも最大級で，そこからあふれ出る合唱は，スケール感がある一方，細やかな表情づけも豊かで，指揮者と合唱団の心が一つとなった，たいへん音楽性にあふれた出色の出来ばえとなりました。

なお，大会審査員は，小原光一氏（横浜国立大教授）をはじめ，皆川達夫氏（音楽史学者），関屋晋氏（合唱指揮者），佐藤眞氏（作曲家）と第一線のメンバーで構成され，このコンクールを権威あるものにしています。

附属中学校では，毎年11月に，富山県民会館大ホールで全校生徒の参加による校内合唱コンクールを実施し，各学年4クラス計12クラスが日頃の練習の成果を発表しあっています。

今回の受賞は，学校の文化的行事の活性化にも大きく貢献していくものと思われます。

学生部だより

冬山登山の事故防止について

今年も冬山登山の時期が来ましたが，昨年12月本学山岳部において，雪の剣岳で雪屁を踏み抜き学生ひとりが滑落して死亡するという事故がありました。

冬山は，悪天候の連続，気象の急変，大雪，雪崩など厳しい自然条件下にあるので，知識や経験，技術に優れていても，天候の急変が直接遭難事故に結びつきます。

冬山の経験豊かな，指導力のあるリーダーのもとで慎重かつ適正な計画と万全の準備を整えて登りましょう。

遭難事故は，家族はもちろんのこと，学校更には，広く社会に及ぼす影響を考え，知識や経験，技術の未熟な者は，この時期の安易な登山は慎しみましょう。

なお，登山の際は，登山計画書を警察署へ提出することはもちろん，その前にクラブの顧問教官及び学生課と十分話し合いのうえ，計画を立て，学生課に「登山・野外旅行届」を必ず提出して下さい。

（学生課学生係）

スキー講習会（在来生合宿研修）のお知らせのコーナー!!

毎年恒例のスキー講習会（在来生合宿研修）が来年も１月上旬に，あのスキーのメッカ，志賀高原で行われます。レベルに合わせて班分けし，体育教官の分かりやすい指導でレベルアップはまちがいありません。スキーをしたことのない初心者の方も，上級者でさらに技術を磨きたい方も存分に楽しんでいただけると思います。アフタースキーには，参加者同士の親睦を深める楽しい企画も用意しています。費用も４泊５日にしては非常に安くなっています。お友達と誘い合って是非是非参加して下さい。

◎実施要項

１．期　　日　平成６年１月７日㈮～１月11日㈫
　　４泊５日
２．場　　所　志賀高原ブナ平スキー場
３．費　　用　約45,000円
　　（リフト代，食事代，宿泊費等を含んでいます。）
４．募集総数　約100名
５．申 込 先　学館２Ｆ　体育会室まで
６．締め切り　12月下旬
７．日　　程
　１月７日㈮　開講式，班編成，オリエンテーション
　　８日㈯・９日㈰　班別スキー講習，分科会
　　10日㈪　班別スキー講習，まとめ，親睦会
　　11日㈫　タイムレース，閉講式

※　スキー板，ストック，スキーケースは，学生部にて無料貸し出しします。スキーブーツ，ウェアー等は用意して下さい。
質問等ございましたら，お気軽に体育会室まで

リーダー研修会を終えて

実行委員長
理学部物理学科　3年　長　　和　俊

平成5年度体育系サークルリーダー研修会が，9月29日（水）から10月1日（金）の2泊3日の日程で，立山連峰の麓，大山町の山野スポーツセンターで開催されました。サークルの次期リーダー及び現リーダー約70名の参加を得ました。

今日の研修会は，リーダーとしての資質の向上と，クラブ員相互及び事務局との親睦を深めることを目的として行われました。

講義，講演はあわせて6つ行われました。全日本のトップレベルで活躍しておられる三協アルミバドミントン部の佐々木忍選手に「経験談」，バレーボールの国際審判員の教育学部助教授の西川友之先生に「リーダー論」，スポーツドクターの経験もおもちの教育学部助教授布村忠弘先生に「ストレッチ」，同じく教育学部講師鳥海清司先生に「有効なトレーニング」，富山女子短期大学教授桑守豊美先生に「スポーツマンの栄養学」をお願いしました。これら講義・講演を通じて得られた知識は，リーダーとして必要なものです。これからのクラブ活動にとても役立つものと思います。

分科会は参加者に八班に分かれてもらい，「クラブ強化」と「クラブ運営」の二つのテーマに沿って話し合ってもらいました。日頃の活動における問題点，課題等について意見を出し合い，自分のクラブに対して新しい視点から見つめ直す良い機会になったことと思います。

体育会役員による「事故防止について」では，過去の事例を通して，発生の状況，その後の対応（リーダーは何をしなくてはいけないのか）等について説明がありました。

リーダー研修会の出発の朝，剣岳で行方不明になっていた山岳部の部員が発見されました。同じリーダーとして皆で黙祷をささげたことをここに記しておきます。

以上の様に行われた研修会ですが，ここで得たものをクラブの日々の練習の中に生かし，体育会クラブの発展の為に頑張っていってもらいたいと思います。

講　義　風　景

早大・大槻教授への手紙

保健管理センター教授　中　村　　剛

親愛なる　大槻先生へ，

＜親愛なるとはなんだ＞ですって。まあ，そうのっけから目に角を立てないでください。私が先生にこんなお手紙を差し上げる気になったのも，その点が心配だったからですよ。だって，先生の現在ただ今のお怒りの発火点は物理学では説明できませんもの。どうかお気をお鎮めになって，最後までお読みくださいませ。

先日，あるテレビ番組で「霊能者VS科学者」というのに出演されていましたね。あれは運悪く出勤時間にぶつかっていましたので，くだらんとは知りつつも……いえ，先生のご発言を除いて……録画しておきました。たしか東海地方の霊能者とかいうおばちゃんの家でひんぱんに掛け軸が自然発火したり，床から血が流れだしたり，スプーンが曲がったりする，という話でしたね。おばちゃんは，自分が霊と交流するのがその原因だとかなんとか言っていました。すごいですね，こわいですね。先生は躍起になって，「そんな物理学の法則に反することが起こってたまるか。そんなことがあれば，宇宙の法則が根本から引っ繰り返ってしまう」と申されていました。自然発火は予め黄燐を塗っておけば簡単に起こる，血はＤＮＡ鑑定すれば誰のものか直ぐに判かる，スプーン曲げは簡単なトリックによる，と。 私もその通りだと思いますよ。この件に関しては先生の圧勝です。しかし，困ったことですが，同席していたキャスター，吉永とかいう女流作家，黒田とかいうジャーナリストは相変わらず半信半疑のままでしたね。こういう，知識人とされる人々が霊能者に同調したり，そこまでいかなくても半信半疑な顔をブラウン管に映し出すからことが面倒になるのですね。

そうなると，先生はいきおい孤軍奮闘の様相を呈してしまいます。先生は物理学的実験結果を武器に正面から霊能者のインチキを撃破しようとされます。正々堂々，古武士の潔さが好感を与えます。まるで源三位頼政（げんざんみよりまさ）ですね。平家物語の頼政は鵺（ぬえ）という，これまた霊能者お気にいりの妖怪を正攻法で退治しますね。それはそれでよかったのですが，弓矢一本槍ではいつも勝てるわけではなく，ついに宇治川の合戦に敗れ，扇の芝生で自刃となりました。そこへ行くと，義経や信長は狡いですね。「やあやあ，遠からん者は音にも聞け，近くは寄って目にも見よ。我こそは桓武天皇九代の後胤……」と真正面から名乗りをあげてから戦にとりかかるべきところを省略し，鵯越（ひよどりごえ）の逆落としとかいって，いきなり背後から襲いかかるイエロー・カード，タケシ軍団ならぬ武田の騎馬軍団を柵でせき止めておいて，種子島は三段構えのレッド・カード，なんとも狡いし，擦れっからしのオフ・サイドだが勝ちは勝ちです。

霊能者を自称している人たちは「行徳のまないた」です……おや，ご存じない？『吾が輩は猫である』にも出てきますがね……千葉県に行徳（ぎょうとく）という所があって，バカ貝がよく採れます。ですから，行徳の家庭のまないたは，バカ貝の料理のために擦れています。つまり，「バカで擦れている」ということですな。先生の正攻法は，まもなく例の霊のおばちゃんに完勝するでしょう。なぜって，おばちゃんは物理的，化学的領域の異変ばかりを持ち出してきたからです。ネタは直ぐにばれるでしょう。それにしても，霊能者のやることは困りものですね，破壊行為ばかりですもの。壊れたものを直すという霊能者がほしいですね，それともどうせ壊すなら核兵器にしてくれたらよいのですがね。いや，余分なことを申しました。

でも，油断してはいけませんよ。行徳のまないたは勝負の土俵を変えてきます。そんな時のため

に，そっとお教えしておきましょう。連中はよく深層心理の土俵を利用しますから。この土俵では物理学という弓矢一本槍で勝負すると窮地に立たされますよ。その時のために，科学的にはじゅうぶんに説明できるのですが，物理学的にはちょっと説明困難な現象の例を耳打ちしておきましょう。

20年ほど前の経験です。小学一年の男の子がある日，突然目が見えなくなりました。私の判断で，お母さんにただのガラスの眼鏡を買ってもらいました。それを掛けさせますと，彼は診察室中，自由にとびはねます。それをとり去ると，彼は手探りをしないと少しも移動できません。精神科医にとっては不可解な現象ではありませんが，一般の人はびっくりするでしょう，もちろん物理学では説明できませんな。これは転換反応という精神的な症状の一種です。口に出すのも畏れおおいことなのでワープロに入れますが，深い悲しみのために，お声が出なくなるということも当然あるのです。決して霊の仕業ではありませぬ。ここだけの話にしておいてください。いま流行(はやり)の，新興宗教もこうした深層心理を巧みに利用しております。「ここは江戸時代に罪人を処刑した所で，浮かばれぬ霊魂がうようよいますぞ」とか言って，暗示をかけますと，ちょっとしたタレントなどは手もなく誘導されて暗示にかかり，催眠状態のなかで八百屋お七の伝言などを口走ったりしますから，こんな場合は，物理学ではなく精神医学の知識をもって対処してくださいませ。

とにかく，土俵がこんなところに移動すると，先生がいかに一騎当千の古武士であろうとも扱いきれないのではないでしょうか。東京にはいまご紹介したような現象を科学的に，私よりはるかに上手に説明できる専門家が大勢いると思いますので，ぜひご利用くださいますよう，お願いいたします。そうすれば怖いものなし，鬼に金棒，アルシンドにアデランスで，霊能者が零能者になること受け合いです。

話は前後しますが，以前物理学の専門家チームがしくじった例がありますので，これもそっとお教えして不躾なお手紙を終わらせていただきます……ある洞窟に霊が出るというので，有名大学のメンバーが霊能者と一緒にそこへ行ったのです。洞窟のある地点で観測が始まったのですが，しばらくして霊能者が「ああ，上の方に何かを感じるぅ〜ん」と言ったのです。すると，観測班の温度探知機もそれに呼応して反応しました。視聴者に与えるインパクトは抜群で，取材班一同，霊の存在を肯定したような結果となりました。ばかばかしいではありませんか。洞窟の一定地点に人々が立ち止まっていれば，呼気や体温でその上の方が暖かくなるのは当然です。それなのに，物理学者までが暗示にかかって，あたかも科学的に霊の存在を認めるような測定機器の使い方をしたのですから。

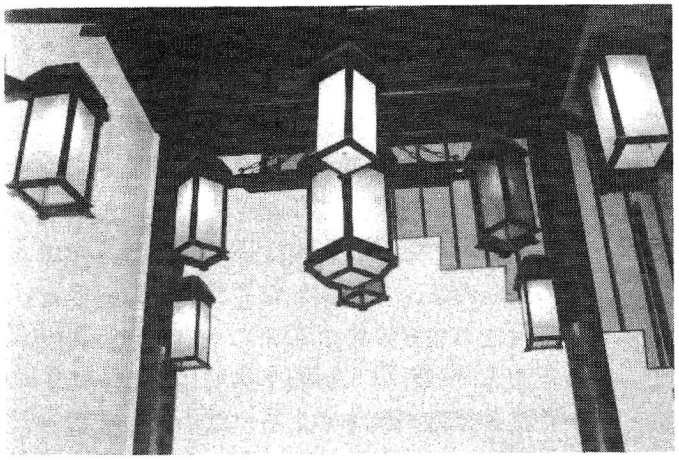
長々とつまらぬお便りをしてしまいました。このお手紙には不思議なことに，締切がありまして，それも今日なのでさっきから大あわて。自分自身が女なのか男なのかも分からんほどのパニック状態で書いたうえに推敲もならず，たぶん，文体などに乱れがあることと存じます。しかも，秘書の不始末から外部に漏れることがあるかもしれません。なにとぞ，ご容赦下さい。

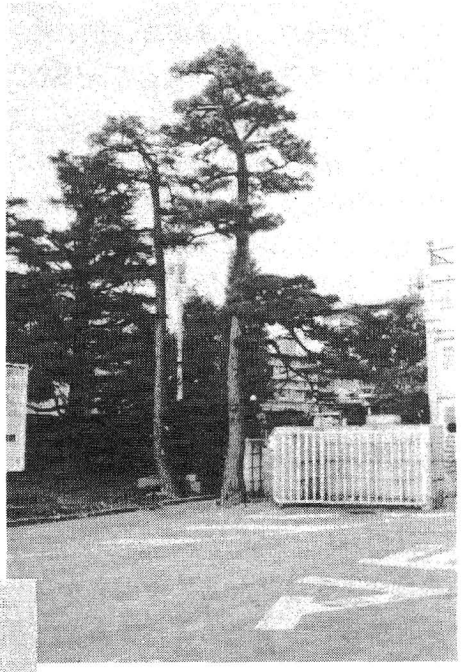
謹言恐懼

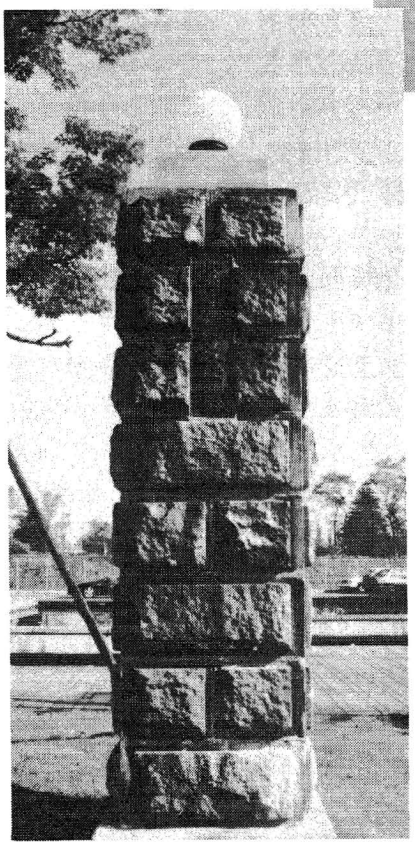
キャンパスウォッチング

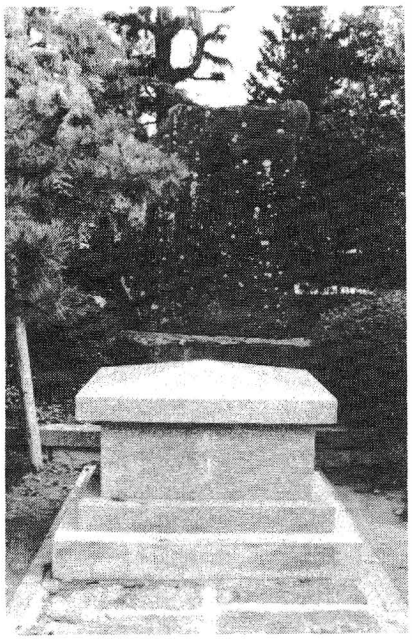
学生部長
人文学部教授　浜　谷　正　人

10年余り前，『プロ野球を10倍楽しく見る方法』という本がベストセラーになったことがある。以来，この種の何かを10倍楽しむ本や雑誌記事を時々見かける。富山大学のキャンパスには，それぞれ由緒をもった石碑や門柱・植木の類が少なくない。普段は何気なく眺めているこれらの歴史的風物の由来・来歴を知れば，一見味気ないキャンパスも10倍楽しく見られるのではなかろうか，という着想で始めたのがこの企画です。今回はその予告。次回から１つずつ紹介します。









「へるん文庫」縁起　5

人文学部教授　平田（ひらた）　純（あつし）

ヘルン文庫のフランス語本は719冊である。それについて，「カタログ」に準拠して説明してみる。フランス文学関係が282冊あって，バルザック全集50巻，アナトール・フランスが22冊，ドーデが11冊，テオフィル・ゴーティエが９冊（全部★印付き），ヴィクトル・ユゥーゴが43冊，モーパッサンが10冊（全部★印），ジュール・ルメートルが22冊，ピエル・ロティは47冊，メリメが６冊（全部★印），ミシェレ５冊（全部★印），ボルテール９冊（７冊★印），ゾラ２冊（★印），その他，ボードレール，フロベール，ミュッセ，ネルヴァール，ラシーヌ全集（３巻），モリエール全集（３巻），スタンダールの作品が見られる。そのうち★印は76冊に上っている。（フランソワ・ラブレーのトマス・アーカートによる英訳はあるが，フランス語本は見あたらない。）

外国文学としてはサンスクリット文学が６冊（すべて★印）あって，ビュルヌフの『バガヴァッド・ギタ』も見られる。ラテン文学ではアプレイウス全集（２巻），オヴィド『愛の技術』のフランス語訳（ちなみに，英語訳も所蔵されている）。アラビアものとしてはマルドリュウスの『千夜一夜物語』（15巻）がある。ドイツ文学ではゲーテの『ファウスト』（ジェラル・ド・ネルヴァール訳），ハイネの『ドイツとフランス』ほか13冊，ザヘル・マゾッホ（マゾヒズムのマゾッホ）の作品６冊がある。ロシア文学ではドストエフスキーの『罪と罰』，『死の家の記録』など４冊，トルストイは『戦争と平和』，『芸術論』，『復活』，『クロイツェル・ソナタ』等７冊，ツルゲネフ４冊（★印），ゴルキー，ゴーゴリ，メジェレコフが入っている。イタリア文学ではダヌンツィオの『死の勝利』がある。全部で380冊の文学関係の本の中で，★印は112冊であり，文学関係の英語本55冊と比較して，きわめて多い。ニューオーリンズ時代にハーンが新聞紙面を通して，フランス文学の新星や（フランス語訳を通して）ロシア文学の新人達をアメリカの読書界に初めて紹介したことを考えれば，それは当然といえるかも知れない。

民俗関係では，全74冊中★印が70冊を占めてくる。グリム兄弟の『ドイツ民話』をはじめ，民話，伝説，歌，諺，迷信等を集めた「世界ポピュラー文学」の中の24巻，フィンランドの叙事詩『カレワラ』に関するもの３冊，アラビア関係，インド関係，フランス関係，更にはイスラム文化に関わるもの，セビヨの海の習俗・迷信等に関する２巻本など，関心の広さが窺われる。

歴史では，彼の『日本』の著述に大きく影響したとみられるフュステル・デ・クランジュの『古代都市』，ミシュレの全集50冊（但し，「女性」の巻を欠いている），シャルネのメキシコと中央アメリカ探検記である『新世界の古い村』，フォンターネの『イストワール・ウニヴェルセル』４巻，マスペロの『東洋人の古代史』，テーヌの『現代フランスの起源』，ウインケルマンの『古代美術史』のフランス語訳が見られる。歴史関係82冊中，★印は23冊である。

地理では総論的なものから，アフリカ，アメリカ，アジア，ヨーロッパ，オセアニアと，世界の各地について，習俗，旅行記，印象記，民俗誌までも含めた，多様なものがみられる。37冊中★印は28冊。

宗教・哲学になると，45冊の中で38の★印がある。（その一冊であるシャレィェの著書は，1904年パリの発行であるのに，ゴム印が押されている。この事実は，ゴム印がその本をニューオーリンズ時代の蔵書と断定する絶対的な根拠になり得ないことを示している。）『リグ・ヴェーダ』から

『コーラン』などのインド，ペルシャ，エジプト及び中国の主要文献を国際科学会議の監修で出版されたという『ビブリオテーク・オリエンタール』5巻，レヴィルの『未開人の宗教』2巻，ロビネの『実証哲学』（オーギュスト・コントとピエル・ラフィットを論じた），それにイスラム教関係が目に止まる。特に目だつのは，シュワッブの『ル・タルムード・デ・イエルサレム』9巻であろう。ユダヤの生活と宗教と道徳を律する法の集大成である「タルムード」にはイエルサレム版（400年頃）とバビロニア版（500年頃）とがあるが，古い方にかかわるものである。

東洋関係としては，★印のついたエルセヴィエル版の『ビブリオテーク・オリエンタル』42冊と老子，朱柏廬家訓，白玉詩書などの中国もののフランス語訳，ロニーの『日本アンソロジー』があるが，他にはカルル・フロレンツの『日本の芝居』（歌舞伎の菅原伝授から「寺子屋の段」をフランス訳し，併せて歌舞伎を紹介したもの。書律長谷川の1900年出版。）テュレッテニによる『平家物語』と柳亭種彦の『こまつと佐吉』の訳も見られる。67冊中★印55点。但し，この部類の中にはセヴェリニによるイタリア語の『日本占星学』が入っている。

言語では所蔵7点の全てに★印があり，現代ギリシャ語学習法，東洋起源のフランス語語源，アラブ派生のスペイン・ポルトガル語についての著書が目につく。『クレオール研究』はドイツ語によるものである。

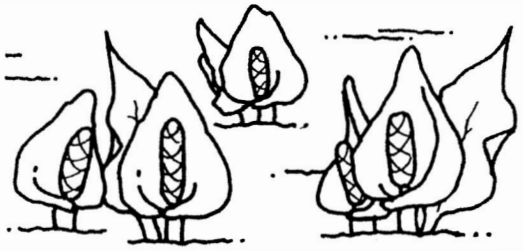
科学関係は16冊あるが，その14冊に★印がある。フラマリオンの『一般天文学』等5巻，サポルタの『人間の到来以前の植物の世界』，リシャルの『地球の起源と終り』，ブロティエの『大地の歴史』などがある。

雑にはカトレイリャの『クロク・ミティーン，レジェンデ・エロイーク』（グスタヴ・ドーレの挿絵入り）が収められている。7冊中6冊★印。

定期刊行物としては「パリ評論」4冊があるが，どれもハーンのエッセィのフランス語訳を掲載している。1900年7月の14号には「日本人の笑い」，1901年3月の6号には「日本の踊り子」，1903年11月の21号には「きつね」，そして1904年4月の8号には「日本の墓地と寺」が掲載されている。

以上でフランス語本の紹介を終る。英語本とフランス語本とを数で纏めると次のようになる。

	英語		フランス語	
分類＼時代	ア	日	ア	日
英文学関係	23	237		
米文学関係	4	34		
仏文学関係	2	2	76	206
欧文学関係	15	46	29	49
選集・批評・文学史	11	290	7	13
神話・民間伝承	6	18	70	4
歴史・地理	21	55	51	68
哲学・宗教	31	125	38	7
東洋関係	28	73	55	12
言語・辞典	8	73	7	
自然科学	37	72	14	2
雑	3	14	6	1
定期刊行物		100		4
ハーン著作		24		
小計	189	1,163	353	366
計	1,352		719	
総計	2,071			



訂　正

第81号(前号)「へるん文庫」縁起４中

45ページ

左欄　４行目

『金枝篇』あベックフォード　→　『金枝篇』やベックフォード

左欄　16行目

『ツァラトゥトラ』　→　『ツァラトゥストラ』

左欄　19行目

ハーバード・スペンサー　→　ハーバート・スペンサー

左欄　29行目

『仏教教典：法句経」　→　『仏教教典：法句経』

右欄　５行目

『日本国語文法』　→　『日本口語文法』

右欄　８行目

サインの入り　→　サイン入り

右欄　11行目

新渡部稲造　→　新渡戸稲造

46ページ

左欄　19行目

『月刊アメリカ評論論評』などが,　→　『月刊アメリカ評論論評』など,

左欄　20行目

没後　→　歿後

左欄　25行目

『作家に語る』モーデル教授　→　『作家に語る』、モーデル教授

右欄　４行目

そこのハーン　→　そこにハーン

右欄　6行目

改行後１～２行あける

右欄　11行目

ゾウ、ピエル・ロティ　→　ゾラ、ピエル・ロティ

右欄　13行目

「大鳥への書簡』　→　『大鳥への書簡』

に訂正します。

お詫び

事務の手違いにより、校正を経ずに発行され、上記のように多くの誤植が生じました。

原稿には一切誤りがなく、執筆者の平田先生には大変ご迷惑をおかけしたことを深くお詫びいたします。

▽▲▽▲▽ 学園ニュース編集委員 ▽▲▽▲▽

学生部長	浜谷正人	経済学部	伊藤格夫
人文学部	中村雅之	〃	長谷川　隆
〃	岩井瑞枝（顧問）	理学部	広岡公夫
教育学部	呉羽　長	〃	鳴橋直弘
〃	原田嘉昭	工学部	女川博義（顧問）
		〃	長谷川　淳